
アンリミテッドラブストーリーオリジン集

閃光広里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンリミテッドラブストーリーオリジン集

【Nコード】

N7238V

【作者名】

閃光広里

【あらすじ】

アンリミテッドラブストーリーの元となった短編とも長編ともいえない長さの作品集です。

この作品がお気に召しましたら是非とも本編のほどもよろしく願います。

TRUE LOVE 〜オリジン〜？（前書き）

この作品が「TRUE LOVE」の原作と言っても過言ではない作品。

この作品を長編アレンジしたのがアンリミテッドラブストーリーの「TRUE LOVE」だったりする。

一番最初に書いた一次創作でもあり、ちょっと「うん？」というところとかあるかもしれませんが、作法以外は忠実に再現します。

また、長編と見比べるのもアリかと。

TRUE LOVE 〜オリジン〜?

……ここは？

『……君』

……だれ？

『……ろ……ん』

……誰が……俺の名を……。

「お兄ちゃん！」

「……んう……里流葉……」

「朝だよ、早く起きて」

「……ああ……」

……さっきのは夢？ ……駄目だ何の夢か覚えてない。
俺はベッドから身を起こし、身体を伸ばす。

里流葉が開けた窓から朝日が部屋に照らされる。

「りる」

「なあに？」

「……いい天気だな」

「うん」

【TRUE LOVE】

俺の名前は藤山宏樹。

で、さっき起こしてくれたのが妹の里流葉。

妹といっても血は繋がってない。

両親の再婚によりできた義理の妹。

俺との歳の差は一歳。

それなのに里流葉は俺の事をお兄ちゃんと呼ぶ。

「はい、どうぞ」

「ああ、サンキュー」

里流葉が作ったフレンチトーストを食べる。

両親は出張で家にはいない。

妹とはいえ、血の繋がってない子と二人つきりはまずいんではと聞いたら、『里流葉ならいいぞ』……と言われた。

しかも、里流葉自身もかなりかわいいし、積極的だから尚更まずい。

「おいしい？」

「ん？ おいしいよ」

「ホント！」

嬉しそうにはにかんでいた。

……ホントかわいいな。

「あ、お兄ちゃん」

「どうした？」

「ちょっと待ってて」

「あ、ああ……」

里流葉は自分の部屋に入っていった。

顔も洗ったし、飯も食ったから後はゆっくりしとくか。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした……」

そこに居たのは学校の制服を来た里流葉がいた。

「……どう？」

「……」

「……変？」

「いや……似合い過ぎて言葉に詰まった」

「え？似合ってるの？」

「うん」

お世辞でもなんでもなく、純粹に似合っていた。

「けど、少し大きくないか？」

「ん、そうでもないよ」

「そうなの？」

明らかに大きい感じが……。

「普通だよ、胸の辺りが少しキツイかな……」

そう言って、自分の胸をいじりだす。

……意外とデカいんだよね……。

「あれ？ どうしたの？」

「え？ いや……」

やべ……胸ばかり見てたか……。

「……てか、そろそろ行こうか」

「うん」

鞆を持ち、二人で学校に向かう。

*

俺達を通う学校の制服は青色で、ある意味目立つ。

「ひろ」

「ん？ 鹿波」

「おはようひろ、りるちゃん」

「おはよう」

「おはよう、鹿波お姉ちゃん」

「りるちゃんも高校生か……早いね」

「なに年寄りみたいな言い方してるんだ？」

「年寄りみたいだった？」

「うん、なあ？ 里流葉」

「え、え」と……」

彼女は井上鹿波と言って、俺の幼馴染みの一人。

「……まあ、いいけど」

鹿波は嘆息しつつ話しを続ける。

「ひとと一緒にのクラスだといいなあ」

「去年違ったよな」

「うん」

「あ！」

突然里流葉が声をだす。

「どうした？」

「あれって……」

指差す方には見知った後ろ姿。

宮河勇樹と佐藤美希だ。

二人とも俺達と幼馴染みだ。

俺達は走って追い付く。

「よっ、おはよう」

「おはよう、宏樹、鹿波」

「里流葉も高校一年生か……早いな」

「勇樹も私みたいな言い方してるね」

「ああ、じじいだな」

「何が？」

「こっちの話だ」

俺と鹿波と勇樹と美希とはホントに長い付き合いだ。

特に鹿波とはお隣同士だし、お互いの親も仲がいいから一緒に遊ぶ機会も多い。

そんなメンバーと一緒に登校する。

*

凡。私立椿山学園——平地に建つこの学園は知名度、部活動ともに平

しかし、設備は私立だから結構綺麗な学校だ。

「里流葉は体育館で入学式だぞ」
「わかってる、じゃあね」

里流葉は手を振りながら体育館に向かった。

「俺達もクラス発表見に行くか」
「うん」
「そうね」

クラス発表は確か……二年の教室前だったわけ？

「……あ！」
「名前あったか？」
「あった……美希と一緒にだ」
「ホントだ、よろしくね鹿波」

鹿波と美希が握手を交わしていた。

「……俺も同じクラスだ」
「あ、俺も」

俺と勇樹の名前もあつた。

「鹿波の願いが叶ったな」

「よかった」

相当俺と一緒にいたかったみたいだ。

「よろしくね、ひろ」

「よろしくな、鹿波」

二人は握手を交わしていた。

「教室入ろうぜ」

「あ、そうだね、行こ、ひろ」

「うん」

勇樹に急かされて教室に入る。

教室に入って少しして担任が入ってくる。

一年生の入学式が終われば、俺達二、三年生の始業式が始まる。

*

校長先生の長いお話中に隣の美希が話しかけてくる。

（宏樹）

（なにさ）

（暇だね）

（……黙って聞いとけ）

（その話しが暇なの）

（はあ〜じゃなにかしたい事あるのか？）

（しりとりしようよ）

（ここですか！？）

（そうだよ）

（どういう神経してんだよ……）

（いたって普通だよ？）

（……わかったよ）

（じゃあ……『り』からね……『りす』）

（す？『すいか』）

（『カラス』）

（す……『スライド』）

（『ドス』）

……あれ？『す』攻め？

（『スリ』）

（『リンス』）

（す……『スイス』）

きた！『す』返し！

けど、美希はサラッと答えた。

（『スタンス』）

（……参りました）

続けるのがダルくなった。

（よし！）

美希は美希でガッツポーズをしていた。

そのおかげかどうか知らんがお話も終わっていた。

＊

HRも無難に終わった。

「さて、終わったし……帰るか？」

勇樹が俺の席に来てそう言った。

「そうだな……午後どうする？」

「里流葉の入学祝いでもするか？」

「あゝそうだな」

「いつものメンバーでカラオケとかどうだ？」

「そうだな、いいと思うよ」

「……」

「どうした？」

「いや、『そうだな』を三回言ったから」

「誰が？」

「お前が」

「あれ？ ……三回も言ったんだ」

「うん」

そんなやりとりをしていると鹿波と美希も俺の席にやってくる。

「なに話てるの？」

「あ、勇樹が里流葉の入学祝いがしたいって言うけど」

「いいんじゃない、ね、鹿波」

「うん、いいと思うよ」

女子メンバーの同意も得た。

「それじゃあ、里流葉を迎えに行くか」

俺達は一年生の階に向かい、里流葉と合流してカラオケ屋に向かった。

「……勇樹のおごりで本当にいいのか？」

「ああ、足りなければ宏樹が出してくれ」

「だったらおごるとか言っちなよ……」

「足りなければの話だから」

「まあ、ゴチになります」

「おう、どんどん歌ってけ」

「勇樹がおごってくれるって！ りるちゃんはなに食べる？」

「み、美希はおごらんぞ！」

「えゝいいじゃん」

「よかねーよ！」

「と、とりあえず飲み物頼もうよ」

……ホント騒がしいよな……けど、嫌じゃない。

「ひろ？」

「え？」

唐突に鹿波が話しかけてきた。

「ひろはなに飲むの？」

「……カルピスでいいや」

「じゃあ私もカルピスにしよう」

「……なあ、鹿波」

「なあに？」

ドリンク表を里流葉に渡してこちらに振り向く。

「……あのさ」

「うん」

「……どうして俺と同じクラスになりたかったんだ？」

「え……」

「そんなの宏樹が好きだからに決まってるじゃん」

「ちょ、美希！」

「へへへ」

「笑わないで！」

好きだから？

……まさか。

「ひろ……ち、違うよ」

手をブンブン振って否定している。

「何が違うの？」

「ひろが……その……好きだからとかじゃないから」

「じゃあ嫌いななの？」

「き、嫌いなわけではないよ！」

「じゃあなんなの？」

「そりゃ……ひろと一緒になればいいなあ……と思っただけ……」

そりゃそうか……お互いを知り尽くした仲だし……。

「んじゃグラス持って」

いつのまにか届いていたドリンクを持つ。

「里流葉の入学祝いに……」

「「「「「かんぱい」「」「」

カコンとグラス同士が重なる音とともに入学パーティーが始まる。

*

「相変わらずいるちゃん、歌上手だね」

「えへへ、そうかな」

有意義な時間を過ごした。

「でも、ホントにおごりでいいのか？」

「なめるなよ、俺の懐はあつたかいから」

「じゃあディナーおごつてよ」

「カラオケ代おごつたる！」

「懐あつたかいんでしょ？」

いつものように口ゲンカが始まった。

「じゃあ俺達帰るわ」

「バイバイ」

「おう、また明日」

「じゃあね」

律儀にケンカを中止して挨拶を交わしてケンカを再開した。

「ホントケンカばっかだな」

「ケンカするほど仲がいいって言うじゃん」

「まあ、そうなんだろうが」

「私達も□ゲンカしてみようか？」

「は？ 何言ってるんだよ」

「だって……」

そこで□ごもる。

「別に俺達はケンカしなくても仲がいいだろ？」

「……そうだね」

鹿波は時折訳のわからん事を提案する。

その発信源は決まって勇樹と美希のやりとりを見てだ。

俺は鹿波の頭をポンポンと軽く叩いて歩きだす。

「え、ちょっと待ってよ」

「待たない、りる、行くぞ」

「う、うん」

けど、内心里流葉の入学と鹿波と同じクラスになれたのに喜んでいる自分に気づく。

「……まさか、な」

「お兄ちゃん？」

「いや、なんでも」

……けど、今年の高校生活はなんとなく楽しくなりそうな気がする……。

そんな事を考えながら家に向かった。

＊

『……君』

……また同じ夢だ。

『ひろ君』

君は？

『私は鹿波、井上鹿波』

鹿波？

『うん鹿波』

……なにしてるの？

『いっしょに遊ぼう』

あ、うん。

＊

「……夢」

昨日と同じ夢だ。

鹿波の夢……どうしたんだろうな、急に鹿波がでてくる夢なんて。夢の中の鹿波は凄く幼かった。それに、視線が同じだったから俺もそれくらいの歳になっている。……夢というのはよくわからん。別に気に止める事なく支度にかかる。

＊

「鹿波お姉ちゃん遅いね」
「そうだな」

鹿波が遅刻する事はそうそう無い。

「お姉ちゃんの家に行ってみる？」
「んゝ時間が無いから先に行こう」
「でも……」
「りるは遅刻するつもりか？」
「わ、わかったよ……」

……心配だから学校終わったら様子を見に行くか。

＊

授業は先生の自己紹介や授業方針の説明を聞かされる。当然まともに聞くつもりはない。それよりも鹿波の席ばかりに視線がいく。そこは当然空席。いないと俺が寂しいんだろうな。そんなこんなであつという間に放課後になる。

「さーて宏樹、帰るか」

「ああ……」

「宏樹」

「なに？」

背後から美希に話しかけられる。

「今日暇？」

「用事ある」

「え？ 無いの！ じゃあちよつと付き合って！」

「は？ 用事あるって……」

「さー、レッツゴー！」

「つて、オイ！ 放せよ！」

腕を掴まれ、強引に連れて行かれる。

……鹿波の家に行こうとしたのに……。

無理矢理連れて来られた場所はゲームセンター。

「なんでまたゲーセンに……」

「いいから、いいから」

「よかないよ！ ……ったく」

*

……満喫してしまった。

「楽しかったね」

「そうですね」

「なにその棒読み」

「マジ楽しかったぜ」

「いや、キモいから」

「はあ」

「？ どうしたの？」

「どうもしないよ」

「まあいいや、はい」

そう言って500円玉を渡される。

「？」

「自販機でジュース買ってきて」

「まさかのパシリ！？」

「おつりで宏樹の分買ってもいいからさ、リンゴジュースお願いね」

「はいはい……」

自販機に向かい、リンゴジュースとフルーツ牛乳を買って美希のいるベンチに戻る。

「はい、ジュースとおつり」

「ありがとう、座る？」

隣をポンポン叩く。

「ああ」

美希の隣に腰かける。

「…ねえ宏樹」

ジュースを飲もうとした時に不意に美希が話しかけてくる。

「なに？」

「……鹿波の事なんだけどさ」
「うん」

さっきの美希とはうってかわり、シリアス口調になる。

「宏樹は鹿波の事どう思ってるの？」
「え……」

どう思ってるか？
そりゃ幼馴染み……だろ。

「宏樹がどう思ってるかは知らないけど……鹿波は宏樹の事をどう思ってると思う？」

「それは……」
「わからないよね……相手の気持ちがわかれば恋愛とか勝負事とか余裕だしね」

そう言っリンゴジュースを飲む。

「ふう」

「美希？」

「私ね……勇樹の事好きなの」

「えっ……」

「けど、勇樹自身は私の事をどう思ってるのかなんてわからない」

「そりゃ、そうだろ」

「……」

「そんな事わかったら恋愛とか楽しくないだろ？ もどかしいもんだと思うよ」

「ならさ……」

俺の方に顔を向ける。
表情は真剣だった。

「鹿波の気持ち……わかるよね？」

「……ああ」

「なら、告白しなよ」

「ただ……その気になれない」

「どうして？」

「さあな」

そこでやっとジュースに口をつける。

「お互いをしりつくした仲なんだぜ。良いところとか悪いところとか……」

特に鹿波が知らない事はないんじゃないだろうか。

「俺は今の関係に満足してるのかもしれない」

「そっ……」

宏樹らしいねと嘆息しつつ言っつてジュースを飲む。

「でもさ」

「？」

「……俺のどこが好きになったんだろうか？」

「知らないわよ、そんなの」

「美希は……どうするんだ？」

「なにが？」

「勇樹に告白」

「宏樹がしたらするよ」

「なんだそりゃ」

「勢いに乗る感じがだよ」

言い終わるとベンチから立ち上がる。

「鹿波は待つてるはずだよ」

「え？」

「宏樹の答え」

じゃあね、と言ってゲーセンを出ていった。

俺の答え……。

それになんだろ……心がモヤモヤとしてきた。
その答えを考えつつ家に向かった。

*

家に着くと里流葉がエプロン姿で玄関にくる。

「お帰りお兄ちゃん」

「ただいま」

「美希お姉ちゃんとデートしてたの？」

「誰からの情報だ？」

「勇樹君」

「ああそつ、間違ってもデートじゃないから
ふーん」

「てか、夜ご飯なに？」

「カレーだよ」

「おお！ りるの少ないレパートリーの一つ！
「なんか一言多いよ！」」

「じゃあ、料理得意なのか？」

「お兄ちゃんと比べたら得意だよ」

「俺と比較しても仕方ないだろ？ 鹿波や美希と比べたらどうだ？」

「うつ……」

「……ダメか？」

「お兄ちゃんのバカ！」

「バ、バカ！？」

「フン！ 今日のお兄ちゃん、夜ご飯無し！」

「うわっ！ 勘弁してくれ」

里流葉の機嫌を直すのに必死だった。

「じゃあさ」

「なんでしようか」

「りると一緒にお風呂に入るならいいよ」

言葉を言い終わると顔を真っ赤にして上目遣いで俺を見る。

しかし、高校生になって、まだ兄と入るのは色々ヤバイ。

……だって胸の膨らみとか。

「ダメ？」

「うつ……」

「エッチな事してもいいよ？」

「いやいや！ それで入ると言ったら俺変態だよ！？」

「兄妹の秘密だよ」

「そんな秘密共有したくねえ！」

「じゃあ、ご飯抜き」

「ぐわっ！ わかったよ、入る、一緒に入る！」

「うん、よろしい」

……まあ、後でどうにかなるだろ。

「お兄ちゃん、姑息な事は考えない方がいいよ？」

「はい……」

夜ご飯を頂きました。

里流葉の多くないレパトリーの中ならとびきり上手い料理にありつけるがレパトリー外だと食べたもんじゃない。

「後片付けするから待っててね♪」

「うん」

チャンス！ 俺は気づかれないように脱衣場に向かう。
しかし、扉に鍵がかかっていた。

「ダメだよお兄ちゃん」

「ひい！」

いつのまにか里流葉が後ろにいた。

「り、りる……後片付けは？」

「後にする。抜け駆けするし」

「うっ……」

「さっ、入る？」

「はあ〜」

*

湯船に浸かる。

その後にタオルを巻いた里流葉が入ってくる。

幼い顔立ちに似合わぬナイスボディの里流葉。

「また胸おつきくなつたか？」
「女の子にその質問はタブーだよ？」
「だったら一緒に入るなよ！」
「……もしかして揉みたいの？」
「んなわけあるか！」
「お兄ちゃん顔真つ赤だよ、かわいい」
「い、妹にいじられてる……」

*

「はあ」

さつさとあがり、リビングでくつろぐ。
……このように我が妹は積極的だ。
だから俺がいつ襲ってもおかしくない状況だ。
俺は里流葉があがってくる前に自室に戻る。
一人になると美希の言葉が脳裏を過る。

「……電話かけてみようかな」

携帯を取りだし、電話帳経由で鹿波にかけてみる。

「もしもし」
「あ、鹿波か？」
「うん、どうしたの？」
「風邪でもひいたのか？」
「うん……かるいから大丈夫だと思うけど……」
「そうか……」

「もしかして心配してくれたの？」

「え、あ、うん」

「ふふっ、ありがとう」

鹿波の声を聞いてホッと胸を撫で下ろす。

「あ、そうだ」

「どうしたの？」

「明日そっちに行ってもいいか？」

「え？ いいけど、風邪うつるよ」

「大丈夫、そんなに風邪ひかないよ、それに鹿波の風邪ならうつっても構わないし」

「え……だ、駄目だよ！」

「鹿波？」

「風邪うつっちゃったら私責任とれないよ？」

「なんだよ責任って……」

「えへへっ……でも」

「ん？」

「ありがとう、ひろ」

「あ……ああ」

電話しているだけなのに気恥ずかしくなってきた。

「じゃあ、もう切るな」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

「お兄ちゃん」

電話を切ると同時くらいに里流葉が入ってくる。

「どうした……って言ってもだいたいわかるが」
「一緒に寝よ？」

「いや」

「エッチな事していいよ？」

「だから、それでOKしたら俺変態だから！」

「む」

「はぁ……わかったよ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

里流葉が布団に入ってくる。

俺も布団の中に入る。

「えへへ」

「なにがおかしいんだ？」

「ううん、なんでも」

「そっ」

里流葉の方に向かないように身体を背ける。

「お兄ちゃん……」

「！？」

後ろから暖かい感触が背中どころか足にも感じられる。

「里流葉……暑いよ」

「お兄ちゃん」

「ん？」

里流葉の方に向く。

「どうした？」

「……頭、撫でて」

「……」

頭を撫でてやる。

「えへへ」

里流葉の頭からほんのりシャンプーの匂いが鼻に入る。

「ホント、俺にベツタリだな」

「うん、だって大好きだもん」

「え？」

「なんでもない」

「そっ……」

何を言ったのかわからなかった。
そのまま意識が落ちていった……。

*

「ひろくん」

なあに？

「……身体に体重かけていい？」

え、うん……。

『ふう……』

どうしたの？

『あのね……ひろくん』

うん。

『私ね、ひろくんの事……』

＊

ベッドから跳ね起きる。

……思い出した、俺、鹿波から……。

横には熟睡している里流葉。

服が乱れて下着がちよつと見える……。

さて、世の男子はどうゆう行動をとる？

1 ．なにもしない

2 ．イタズラ

3 ．襲う

俺は1ね。

だから何もしないで部屋を出る。

顔を洗い、準備をする。

ついでに置き手紙『夜ご飯までには帰る』を机に置いておく。

俺の家を出て、コンビニに向かう。

＊

「ありがとうございました」

買った物は、俺の飯とミネラルウォーターを二本。
その足で鹿波の家に向かう。

家は隣同士だし、親同士も仲がいい。

その為かどうか知らんがそれぞれの合鍵を持っている。

……まあ、俺と鹿波しか持ってないけど。
鍵を差し込み、鍵を開ける。

「おじゃまします」

家の中は静かだった。

休日なのに親は働いているんだろう。

鹿波の部屋の前にきてノックを二回。

「はい」

「宏樹だけど、いい？」

「うん、いいよ」

ドアノブを握り、扉を開ける。

「ホントに来ちゃったんだ」

「まあな」

ベッドの近くに腰かける。

「具合どうだ？」

「まだ、少し熱があるかな」

「どれどれ……」

鹿波のおでこに俺の手を重ねる。

「んゝ熱あるよね」

「だからあるって言ったじゃん」

……自分でも気づかないうちに喜んでいた。
何に？ 鹿波と話せるから。

「朝食べたのか？」

「うん、一応」

……なんだろ、胸がドキドキしてる。
もしかして、俺は……。

「ねえひろ」

「ん？」

鹿波が身体を起こす。

「……お願いが、あるの」

「なにかな？」

「……そばに、居て？」

「うん、俺も鹿波のそばに居たいと思ってたところだ」

「え？」

俺はベッドの上に乗リ、壁に背もたれる場所を陣取る。

「……もたれて、いいから」

「う、うん」

鹿波はゆつくり俺にもたれかかる。

「は、恥ずかしいな」

「俺達だけだぜ？」

「そうだけど……」

「なあ、鹿波」

「ん？」

「……俺が風邪を治してやろうか？」

「え、どうやって？」

「く、口づ……」

言葉に詰まる。

鹿波も言いたいことがわかったのか顔を赤らめる。

「そ、そんな事したら、ひろがうつるよ？」

「昨日言っただろ？ 鹿波の風邪ならいって」

「い、言っただけど……」

「……なら賭けをしよう」

「？」

首を傾げる。

「今から、その……キスしてやる」

「えっ！」

「そ、それで、風邪ひかなければさ……俺と付き合ってくれるか？」

「……ひろ？」

「うっ、メツチャ恥ずかしいじゃん！」

「知らないよ！」

二人微笑。

「……俺な、思い出したんだ」
「なにが？」

「ガキの時に鹿波に告白されてたという事」

「……」

「俺、まだ答え言ってないよな？」

「……うん」

俺は鹿波を後ろから抱きしめる。

「ひ、ひろ！？」

「……好きだよ」

「え……」

「だ、だから鹿波の事好きだと言っただ」

「……じゃあ私と……」

「うん」

鹿波の顔がこちらに向く。

「ひろき……」

「……して、いい？」

「うん」

お互い目を瞑り、唇同士を重ねる。

唇を離し、お互い見つめる。

「……私の初めてがひろ」

「俺の初めては鹿波……てかその発言やバくない？」

「ん？ そうかな？ ……もしかしてやましい事考えてた？」

「へ？ い、いや……」

「顔赤いよ？」
「う、うつさい」
「……したい？」
「へ？ い、いや、したいわけないだろ」
「キスしたくないの？」
「え、ああ、したい」
「……絶対エッチな事考えてたでしょ」
「か、考えるわけが……」
「じゃあ、する？」
「へ？」
「私は……いいよ、しても」
「……やめとく」
「どうして？」
「鹿波が大事だから」
「え……」
「それに……」

鹿波を抱き寄せる。

「あ……」
「今は鹿波と居るだけでいいから」
「……うん」
「……一緒に……寝るか？」
「え？」
「ご、ごめん、変な事言つて……」
「いいよ」
「……いいの？」
「一緒に寝よ？」
「うん」

シングルベッドに二人が入っているから、至るところで鹿波の身体が当たる。

「寝てるときに襲わないでね」

「襲わないよ！」

「ホント？」

「……胸くらい揉むかも」

「ひろのエッチ」

「冗談だよ」

「目が冗談じゃなかったよ」

「え、マジ？」

「うん」

そんなに鹿波の胸触りたかったのだろうか？

「……ひろ」

「なに？」

「もっと、近づいて」

「あ、うん」

ほとんど鹿波と密着状態になる。

「む、胸……当たってるよ」

「嬉しいでしょ？」

「まあ……」

無意識に肯定していた。
俺は鹿波を抱き寄せる。

「あ……」

「もう一回、キスする？」
「うん」

*

いつのまにか爆睡していた。
横には鹿波の寝顔。

さて、世の男子はどうゆう行動をとる？

- 1 なにもしない
- 2 キス
- 3 襲う

……俺は2で。

しかし、唇は流石に気が引けるのでほっぺにしておく。
キスをし、ベッドから鹿波を起こさないように降りる。

「すう」……「すう」

……改めて見ると……可愛いな。
無性に悪戯したくなってきた。

……マジで胸触ってやろうかな？

すると不意に鹿波の目が開き、俺を見つめる。

「……ひろのエッチ」
「な、まだ何もしてない！」
「する気だったんだ」
「うっ、い、今起きたの？」
「うっん、ひろがほっぺにキスした辺りから」
「うわっ！ メッチャ恥ずかしいじゃん！」

「だから、知らないよ」

……付き合っただって、きっと変わらないんだろうなあ。
元々こんな感じだし。

「鹿波」

「なに？」

「腹減ったか？ てか食欲ある？」

「うん、そうだね、何か作ろうか？」

「いやいや、お前風邪引いてるだろ？」

「うん、じゃあどうするの？」

「俺が朝食用に買ってきたパンとかあるし、一緒に食うか？」
「じゃあそうする」

*

「「ごちそうさま」」

「薬はあるのか？」

「うん、ここにあるよ」

適当に雑談し、時間が過ぎていく。

「あ、もうこんな時間か……」

「ホントだ」

「じゃあ、俺もう帰るわ」

「うん」

「ちゃんと寝るんだぞ」

「うん……」

「あと……」

「ひろ」

「うん？」

「……ありがとう」

「え？ あ、うん」

なぜだか心臓が突然ドキドキしてきた。
このまま帰ってもいいのか？

「か、鹿波」

「ん？」

「さ、最後に……キス、してもいい？」
「いいよ」

……

「じゃあ……な」

「うん……」

鹿波の部屋を出ていく。

自分の唇を無意識に指で押さえる。

……鹿波と、しかも三回もキス……したんだよな。

……風邪うつるかもしれないな。

まあ、うつったっていいけど。

そんな事を考え、家に向かって歩く。……すぐそこだけど。

「ただいま」

「おかえり、お兄ちゃん」

風邪引くなよ……引いたら賭けに負けてしまつから……やっぱり負けてもいいか。

そんなこんなで今日が終わる。

TRUE LOVE 〜オリジン〜？

『ひろくんはどう？』

どうと聞かれても……。

『じゃあ、私の事好き？』

……あ！ そうだ、用事思い出したんだ、じゃあね。

『えっ……』

*

……俺はあの時なぜ答えを出さなかったんだろうか。

「ひろ」

「……かな、み……鹿波！？」

「あ、起きた？」

なぜか俺の部屋に鹿波がいた。

「ひろの寝顔可愛かったよ」

「あ、そう……」

少し恥ずかしくて俯いていまう。

「で、どうして俺の部屋に？」

「ひろを起こしに参りました」

「……てか、風邪はもういいのか？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「そうか、そりゃよかった」

「早速だけでも着替えてくれる？」

「何で？ どちら行くの？」

「どちら行くから早く着替えて」

「はいはい……」

どっかって、どこ行くんだ？

時間は7時ちょっと過ぎ。

「着替えましたよ」

「じゃあ顔洗って」

「へーい」

・・・

「洗いました」

「じゃあレッツゴ」

「まてまて！ 朝食は？」

「あとあと」

「うう」

里流葉はまだ寝てるだろうし、置き手紙『夜までには帰る』と書いておく。

家の鍵を閉め、鹿波の後をついて行く。

「ひーろーきー」

少し歩くと後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

「……あ」

「おはよう、宏樹」

勇樹と美希だった。

「あ、おはよう……」

「なんでいるの？　みたいな顔だね」

「なんでいるの？」

「なんででしょ？」

……美希に聞くんじゃないかった。

「勇樹、何で？」

「ダブルデートってやつだ」

「はあ？」

「鹿波と宏樹は付き合ったんだろ？」

「だ、誰から？」

「俺は美希から」

「私は鹿波から」

「ごめん、嬉しかったから……」

「ま、まあいいけど……てかダブルデートってもしかして……」

「ああ、俺と美希も付き合う事にした」

「はあ！？」

俺の知らない新事実。

「誰からコクったの？」

「俺から」

「へえ、勇樹から……勇樹が！？」

「しちゃ悪いのかよ」

「いや、いいけど……両想いだっただ」

「まっ、そういう事」

「そちらはどちらがコクったの？」

美希が期待の眼差しで俺を見ている。
しかし、コクってないような……。

「……私」

「「え？」」

俺と美希の声がハモる。

「小さい時の答えをひろが答えてくれたから……」

「あ、ああ……」

そうだった……俺は答えを先送りしてたんだ。

「まあ、でもよかったじゃん」

「うん」

「さっ、早く行こ」

「ああ、だけどどこ行くんだ？」

「そんなの決まってるじゃん」

*

「んゝ惜しい」

「勇樹ガンバ！」

「「……」」

なぜかバッティングセンター。

（……なあ、鹿波）

（なに？）

（これはお前が言ったのか？）

（まさか、私もビックリしてるくらいだし）

（俺てつきり遊園地とかだと思ってたのに）

（私も）

「「はあ」」

二人で嘆息する。

「次宏樹だよ」

「え、俺もするの？」

「当たり前よ」

と、言いつつ美希は俺に耳打ちしだす。

（鹿波にカッコいいところ見せなさい）

（えゝ何で）

（いいから）

「……はあ」

バットを手に取り、小銭を入れ、バッターボックスに入る。
空振り少々、凡打少々、ヒットそこそこだった。

「はあ、ダメダメね」

そしてなぜか美希に嘆息される。

「かつこよかったよ」

「マジで？」

「うん」

「かなみ」

「ちょ……」

なんか嬉しくなつて鹿波に抱きついていた。

「も、もう……」

「よし、次私ね」

「美希、打てるのか？」

「もちろん、なめないでね」

……そこそこ打っていた。

「どう？」

「いや、どうと言われても……」

「次鹿波ね」

「わ、私！？」

「うん、はい」

「ううゝ打てるかな？」

「鹿波の彼氏に教えてもらったら？」

そして俺を見る。

「鹿波、ファイト！」

「さっさと教えてきなさい！」

「わかったわかった」

美希に脅されつつ、鹿波と一緒にバッターボックスに立つ。

「こ、こう？」

「いや、もっところ」

「わ、わからないよ」

「体育とかどうしてたんだ？」

「全部三振だよ？」

「鹿波君には無理だ、じゃ」

「見捨てないでよー！」

半泣きだったから見捨てるのを止めた。

「いいか？ まずこうして……」

鹿波の後ろに回り込んで、バットの持ち方とか色々教える。

「う、うん……」

……かなり密着してるんだよなあ。

それを楽しそうに見ている美希が視線に入る。

……絶対楽しんでいやがる。

「でも、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、元々鹿波は運動センスはあるほうだから」

「そうかなあ？」

「そうなの。お金入れるぞ」

「うん」

お金を入れ、バッターボックスから離れる。

最初は空振りが多くて、見る限り半泣きに近かったが、後半はバットに当たりだし、最後の一球はヒットゾーンに打っていた。

「あ、当たったよー！」

「おーよしよし」

「ご褒美に鹿波の頭を撫でてやる。」

「全員やったし、移動しましょ？」

「今度はどこ行くんだ？」

美希の後をついて行くと近所の河川敷に着く。

「じゃあ、宏樹と勇樹はここで待ってて」

「……今度はなんだ？」

「昼食をとりに行ったんだ」

「昼食？ もうそんな時間？」

「ああ、ここで昼食らしいぞ」

「ふうん」

……て事は美希と鹿波のお手製か。

「……なあ、宏樹」

「ん？」

「昔な、宏樹は美希の事好きだったんだろ？」

「何を唐突に……」

「知ってんだぜ、ガキの時に鹿波から告白された時逃げたらしいじゃないか」

「……まあ、そうなるな」

確かに当時の俺は美希の事が好きだったのかもしれない。
だから鹿波の告白も無視したのだろう、そして俺はそのまま忘れてしまったのかもしれない。

「……鹿波に悪い事したよな、俺……」

「罪悪感があるなら鹿波を守ってやりな」

「そうだな」

「おまたせ」

「おっ、きたきた」

美希と鹿波がバスケットを持って帰ってくる。

「うわ、うまそう」

「美味しいよ」

「それじゃあ食べましょ」

「……いただきます」

「モグモグ……うまい！」

「ホント？」

「うん、流石鹿波だな」

「えへへ」

「はい、アーン」

「へ？」

「ほら、アーン」

「ア、アーン……」

「……」

二人のやりとりを見つめる俺と鹿波。
そして、二人で耳打ちする。

(……やる?)

(俺は……どっちでも)

(じゃあ止めとく?)

(そうしよう)

「あれ? お二人方はアーンしないの?」

「!?!」

こつこつ時の美希は正直うつつしい。

「ア、アーン」

「へ? やるの?」

「うん、アーン」

見るからに手がガタガタ震えている。

「お、落ち着け……美希の思うつぼだ」

「アーン」

「うつ……アーン……」

「ヒュ〜お熱いね〜」

「うつさい! お前が鹿波を変えた〜!」

「……」

鹿波なんか顔真っ赤で黙りこんでしまう。

「てか、今更恥ずかしがる事ないと思うぜ」

「そりゃ、そうだが……」

「そりゃやましい事とかしたなら話は別だが……」

「……」

両者俯く。

「……したの？」

「さ、さあ」

「お、おまえら……やったのか？」

「……」

「一線越えたの？」

「？」

「なぜそこで首を傾げる」

「どうせキス止まりでしょ」

「……」

「図星だな」

「図星ね」

「だってキスだよ！？ 恥ずかしいだろ」

「別に」

「ええ」

「てつきり一足早く大人になったのかと」

「なにそれ？」

「お前ホントに男か？」

「男です」

「はあ、エッチしたのかと思ったただだよ」

「エッ……」

「……なんか初々し過ぎる」

「まあ、別に急いでももんじゃないし」

「し、したほうがいいのかな？」

「それは好きにしてくれ」

鹿波と……なんか想像できん。

「ひ、ひろのエッチ……」

「何で俺の考え読めるんだよ！」

「鹿波、気をつけな、いつ宏樹に押し倒されるかわからないよ」

「こら、美希！ いらん事を……」

「ひ、ひろなら……」

「……」

鹿波以外顔がひきつる。

……なぜこの子はこうもサラツと言っちゃうかな。

「よ、よかったね、鹿波がいった」

「いや、押し倒さないし」

「鹿波では宏樹の性欲を満たせないだって」

「んなこと言ってねえ！」

「……」

うわっ、泣きそうな顔。

「え、えつと……鹿波で充分だから」

「だったら今すぐ押し倒せ！」

「美希は黙ってる！ つーか押し倒さないよ！」

……こんな感じで昼食を済ます。

「さて、食ったし昼寝でも……」

「キャッチボールしよ」

「……は？」

美希の突拍子もない提案でキャッチボールをする事に。

「キャッチボールするにもボールとグローブが無いぞ」

「はい」

と、言って美希のバスケットからボールと人数分のグローブが出てくる。

「じゅ、準備いいね」

「もちろん！」

最初からやる気だったな。

「いくよ、そおーれ！」

「ってバカ！ どこ投げてる！」

「あれ？」

・・・

「疲れた」

「うん」

「休憩しよう」

「そうだね」

近くの木の下で休憩をとる。

「しかし、結構動いたよな」

「ああ、美希の大暴投で振り回された」

「今日調子悪いみたい」

「そういう事にしといてやる」

「それにしても鹿波はコントロールいいな」

「そうかな？」

「だから言っただろ？ 鹿波には運動センスがあるほうだから」

「えへへ」

「……それ、100%褒めてるのか？」

「80くらい」

「後の20はなんなの？」

「残りは運動オンチ」

「20%はオンチだったんだ！」

そんな話を話していたらいつの間にか夕方になっていた。

「そろそろ帰るか」

「そうだな」

勇樹と美希と別れ、残った俺と鹿波で家に向かった。

*

「それじゃあ後で行くね」

「ああ」

鹿波と別れ、家に入る。

「ただいま……」

家は真っ暗で静まりかえっていた。

「里流葉」

いつもなら飛び出てくるのに。

リビングに入ると、真っ暗な部屋の中に里流葉が椅子に座ってい

た。

「どうした？」

「……」

「里流葉？」

里流葉の顔がこちらに向く。

「泣いてるのか？」

「お兄……ちゃん」

「どうした？ 何で泣いてるんだ？」

「……」

「りる、どうし……！？」

突然里流葉は俺に抱きついてくる。

「お兄ちゃん……」

「りる？」

「りるの事嫌いになったの？」

「はぁ？ 何で急に……」

「だって、休日なのに全然かまってくれないんだもん……」

「だからって嫌いになるわけが……」

「鹿波お姉ちゃんと付き合ってるんだよね？」

「え？」

「お姉ちゃんと付き合ってるんでしょ！？」

「あ、ああ……」

「どうして……りるじゃないの？」

「どうしてって……」

「りるはお兄ちゃんの事大好きなのに！」

「……」

……知っていたつもりだ。

けど、俺は里流葉ではなく鹿波の事が好きなんだ。

「……妹だから？」

「……ならさ」

「？」

里流葉の質問を無視し、逆に質問する。

「どうして俺の事が好きなんだ？」

「……りるがここに来たときに……」

里流葉が来たとき、俺は小学二年生だった。

『宏樹の妹だぞ』

『妹？』

『ああ、里流葉って言うんだ』

『りるは？』

『お兄ちゃん』

『お兄ちゃん……』

衝撃的だった。

親の離婚から半年後に別の人と再婚、その時できたのが義妹の里流葉だった。

「お兄ちゃんはりるを沢山守ってくれたから」

「それは……」

兄だからと言おうとしたが、止めた。

「そしたらね……」

俺の顔をしっかりと見定める。

「お兄ちゃんに、恋しちゃったの」

禁断の恋に近いよな……血は繋がっていないとはいえ、兄と妹な
んだから。

「ずっと……好きだったの」

「りる……」

「……ねえお兄ちゃん」

「ん？」

「どうしよう」

「な、何が？」

「お兄ちゃんが……欲しいよ」

「えっ……」

俺は後退りするが、ソファーに引っ掛かり、ソファーに座ってしま
う。

さらに里流葉は俺の膝の上に座ってしまふ。

「もう、止められないよ……」

「り、里流葉……待て……」

「キス……ずっとしたかった」

「里流……！？」

俺の口に感触が感じられる。

「んう……お兄ちゃん……」
「り、りる……」

その時、インターホンが部屋に鳴り響く。
鹿波が来たんだ。

「出ないと」
「ほっとこよ」
「いや、そういうわけには……」
「りるだけ見てて……」
「りる、止め……!？」

里流葉は鹿波が来る事を知らない。
まずい、このままでは……。

何度か鳴っていたインターホンが静まった時に鍵が開く音が聞こえた。

間違いない、鹿波だ。
しかし、里流葉は気づいていない。
俺の鼓動が一段と速くなる。
背中に冷や汗が垂れる。
足跡が徐々に近づいてくる。
そして……。

「ひろ」
「……」

最悪だ……。

「お、お姉ちゃん!？」

里流葉も鹿波の存在に気づき、慌てて身体を離す。

「……ご、ごめん」

「あ、待って、鹿波！」

鹿波は目に涙を溜めて家を出ていった。

「……」

「……お兄ちゃん」

「……里流葉は悪くないから」

「でも……」

「ちよつと行ってくる」

「う、うん……」

俺は鹿波の後を追う。

「家かな？」

鍵を開けて靴を見てみると鹿波の靴が投げ捨てられていた。

俺は鹿波が居ることを確信し、鹿波の靴をきれいに揃え、部屋に向かう。

鹿波の部屋の前に来たときに鹿波の泣き声がつつすら聞こえてくる。

グサツと何か突き刺さる感覚に襲われる。

ノックしようとする手が震えているのがわかる。

けど、ノックしないと進まないからノックする。

泣き声が静まる。

「か、鹿波……入る……」

「来ないで！」

「!？」

鹿波の悲痛な叫びが廊下に響く。
けど、俺はそんなに引き下がらない。

「入るぞ」

「来ないでえ！」

無視してドアを開ける。

「!？」

「っ!？」

枕を抱えて顔を半分隠した鹿波が俺を見つめていた。

「な、なに？」

「鹿波……すまない」

「別にいいよ、りるちゃんがひろの事好きなの知ってたもん」
「え？」

「相談されたたの……ひろの事で」

「里流葉が……」

「でも、私も……好きだからあまり協力しなくなかった……」

「鹿波……」

「ひろは……私かりるちゃんのどっちを選ぶ？」

「どっちって……」

「りるちゃんを選んであげたら？」

「えっ……」

「私は今までのりるちゃんの協力ができなかったから、せめて」
「なら鹿波はどうするんだ？」

「私は……いいよ」

「よかないよ」

「私なら我慢できるから……」

「よかないって言ってるんだろ！」

「！」

「俺はずっと鹿波を待たせてたんだ」

「だから、なれてるから……」

「っ！」

「！？」

俺は力任せに鹿波をベッドに倒し、上に乗る。

「ひ、ひろ……き」

「お前はいいかもしれないが……俺は耐えられないよ！」

「……」

「お前の気持ちを知って里流葉の方に行けるわけないだろ！」

「だ、だけど……」

「俺だって……今も悩んでる、二人の女の子の気持ちを知ってるんだから」

「……」

「俺は幼馴染みか義妹のどっちについたらいいんだ？」

「それは……」

「……俺はな、鹿波」

「？」

「里流葉には悪いが……俺は鹿波の事が大好きなんだ」

「！？」

「だって……鹿波が我慢している時や、ツライ時とか見てられないんだ」

「ひろ……」

「いつの間にかお前の事が好きで好きでたまらないんだ！」

いつの間にか俺の目に涙が溜まりだしていた。

「ひろ、ごめん」

「どうして、謝るの？」

「ひろの気持ち、考えないであんな事言っ……」

「いいよ、俺も悪いから」

すると、鹿波の腕が俺の背中に周り、抱き寄せられる。

「か、鹿波！？」

「……ひろくん」

「！？」

小さい時の呼ばれ方。

いままで呼ばれてきてたけど、改めて聞くとドキッとしてしまう。

「かな……ちゃん」

「私ね、ひろくんの事、好きなの」

「うん」

あの時とほぼ同じ。

「私と……付き合ってください」

俺はその答えを先送りしたんだ。
だから、今度は逃げないで……。

「うん、俺もかなちゃんの事好きだから……いいよ」

「……ありがとう」

「鹿波」

「……宏樹」

自然に二人は唇を重ねていた。
お互いの涙が鹿波の頬で混ざり合いながら……。

*

次の日

「おはよう、ひろ」

「おはよう、かな」

あれ以降、お互い幼少時のあだ名で呼びあうようにした。

「お、おはよう、鹿波お姉ちゃん……」

「おはよう、りるちゃん」

「ご、ごめんなさい！」

「え？」

「お姉ちゃんの……その……」

「ああ、それなんだけど、りるちゃんならいいわよ」

「へ？」

「ひろは私とりるちゃんのもの」

「え、そんなの聞いてな……」

「い、いいの!？」

「うん」

「やった〜」

「か、鹿波！ そんなの聞いてない！」

「いいじゃない、ね？ りるちゃん」

「うん」

「うわ〜」

すると、俺の両腕に柔らかいのがあたる。
かなとりるの胸だ……。

「早く行こ？ ひろ」

「お兄ちゃん」

「はぁ、はいはい」

まさしく両手に花、だな。

それも、とびつきりきれいな花。

「ひろ」

「お兄ちゃん」

「ん？」

「「ずっと一緒だよ」「」

……これでよかったのかな？

「うん」

いいんだ、そういう事にしよう。

END

TRUE LOVE 〜オリジン? (後書き)

これがある意味ハーレムエンド?

長編との相違点はいくらかあり、里流葉は母方の娘ということになっていたり、その他もいろいろ変わっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238v/>

アンリミテッドラブストーリーオリジン集

2011年10月7日11時00分発行